

に施行した LMT 病変についての成績と、適応、その後の展望について述べる。全体の PTCA については 702 病変であり、成功率は 552 病変、74.4%であった。次に LMT 病変に対して PTCA を施行した 6 例について提示する。年齢は 16~69 才で、男：女 = 4：2 であった。初期成功例は 1 例のみであったが 3 カ月後の CAG にて再狭窄を起こし、CABG 再度施行した。その 1 例を提示する。Left Main Coronary Angioplasty について当循環内では、left coronary circulation が保持されているもの、あるいは AMI 例のみ施行することとし、AMI 例は PTCA が成功しても全例 CABG すべきものと考えている。今後の方針として LMT 病変に対して coronary atherectomy あるいは coronary stent も考えられるが、coronary atherectomy では 1989 年 10 月 19, 20 日の Cleveland Clinic “Interventional cardiology” 講演によると、6 カ月後の再狭窄は 44% で今後検討を要すると思われる。

5) 急性心筋梗塞に対する初期治療法の変遷と急性期生命予後について

大塚 英明・相崎 俊哉
内藤 直木・土谷 厚 (新潟こばり病院)
矢沢 良光 (循環器内科)

1984 年 1 月より 1989 年 12 月までの 6 年間に当院に入院された急性心筋梗塞 323 例 (年齢 26~94 歳, 平均 65 歳) を対象とし、発症 24 時間以内の初期治療により 3 群に分類。急性期の臨床経過及び死亡率について比較検討した。

結果：対症治療群 (G1) 207 例, PTCR 群 (G2) 79 例, PTCA 群 (G3) 37 例において、急性期 (<4w) 死亡率は 21.3%, 7.6%, 2.7% であり、それぞれ有意差 (G1>G2>G3) を認めた。また PTCR, PTCA, CABG 等の観血的治療を 2 次的に必要とした症例は対症治療群 20 例 (9.7%), PTCR 群 18 例 (22.8%), PTCA 群 1 例 (2.7%) であり、PTCR 群で有意に高率であった (G1<G2, G2>G3)。年別死亡率では前半 3 年間の平均 24.4% に対し、PTCA 開始後の後半 3 年間は 9.9% と有意に低下が認められた ($p<0.01$)。

結論：① PTCR・PTCA による再疎通治療により、急性期死亡率は有意に低下した。② PTCA 群では PTCR 群と比較し、2 次的間欠的治療の必要性が低下した。

6) A-C バイパス後に PTCA を試みた家族性高コレステロール血症 (IIa-homozygote) 一術後の再造影所見を含めて一

竹内 衛・大竹三津雄 (立川総合病院小児科)
松岡 東明 (同 循環器内科)
坂下 勲・春谷 重孝 (同 胸部外科)
佐藤 勇・福島 英樹
佐藤 誠一 (新潟大学小児科)
中野 徳・笹川富士雄 (水原郷病院小児科)
松井 俊晴 (新潟県立中央病院小児科)
笹崎 義博 (新潟県立がんセンター)

症例は現在 17 歳の男児。黄色腫のため 1978 年に新潟大学小児科に入院し、上記の診断を受けた。1981 年より血漿交換療法を開始した。1988 年 7 月 13 日より、胸痛および血圧の変動があり以後、unstable angina の状態となり、徐々に薬物治療に抵抗するようになった。

9 月 1 日に当科で心臓カテーテル、心血管造影を施行。同 9 日に A-C bypass を施行し、術後は自覚症状は軽快した。11 月 9 日に術後カテーテルと PTCA を施行したが PTCA では有意な拡張効果は得られなかった。

1989 年 12 月 6 日に 1 年後の造影を行なったが、A-C bypass の開存性は良好であった。

7) AC バイパス術後一年までの追跡観察

小池 隆司・五十嵐 裕
松原 琢・山崎ユウ子
田村 雄助・山添 優
和泉 徹 (新潟大学第一内科)

1987 年 1 月から 1989 年 8 月までの当院における AC バイパス術例について、術後のグラフト開存率、症状改善度、左室壁運動の変化を追跡観察した。【対象及び方法】症例は 47 例。術後早期 (1~3 カ月) と 1 年後のグラフト造影、運動負荷試験、左室造影より検討した。

【結果】バイパスされた総グラフト数は 95 本で、平均グラフト数は 2.0 本/人であった。手術死亡は 1 例 (2.1%) にみられた。術後早期に評価したグラフト 92 本 (SVG 76, IMA 16) のうち閉塞は 13 本 (14.1%) にみられ、RCA 1/28 (3.6%), LAD 9/44 (20.5%), Dx 0/8 (0%), Cx 3/12 (25.0%) であった。1 年後に観察したグラフト 48 本の閉塞率は 22.9% で RCA 0/12 (0%), LAD 9/24 (37.5%), Dx 1/6 (16.7%), Cx 1/6 (16.7%) であった。狭心痛は 87.5% の消失率で、運動時間も有意に延長した。左室造影では、術後早期に容量は減少傾向にあった。駆出率に有意差はなかったが改善する症例もみられた。